

ともしび運動「新行動指針」の策定について

平成 19 年 10 月 22 日

【「新行動指針」策定の趣旨】

ともしび運動は、「ともに生きる福祉社会づくり」をめざして、昭和 51 年に提唱され、平成 18 年で 30 年を迎えました。

この間、地域を基盤とする施策や障害者施策、バリアフリー環境の整備など福祉関連分野も含めて社会基盤の整備がすすむとともに、ボランティアや当事者による住民主体の活動が活発になるなどの成果を上げてきました。

昭和 63 年には、運動の道しるべとして「ともしび運動・行動指針」を策定し、運動の推進を図ってきました。しかし、その後 20 年近くが過ぎ、少子高齢化や核家族化、価値観の多様化がすすみ、住民相互のつながりが希薄化するなかで、いじめや虐待、引きこもり、ホームレスなど新たな社会問題も生じてきました。こうした状況の中で、だれもがこれらの問題を自分自身の問題としてとらえ、より一層、福祉活動などへの参加を、広げていくことがあらためて大切であると考えました。

そこで、引き続き「ともに生きる福祉社会づくり」をめざし、地域福祉の推進と福祉コミュニティの形成をすすめるため、次のような視点で新たな行動指針(以下、「新行動指針」)を策定しました。

【「新行動指針」策定の視点】

- ① 高齢者や障害者、子ども、外国籍の人など、だれもが主役になり、多様な人とのつながりを築き、共生の社会をめざすこと
- ② 福祉社会をつくるためには、一人ひとりの具体的な参加と関係機関・団体との協働が不可欠なこと
- ③ 一人ひとりの関心や能力に応じて、参加・行動できる環境を社会的に整えること

【「新行動指針」の活用】

この「新行動指針」は、一人ひとりの県民、企業や団体の方など様々な立場の人が、心豊かに支えあう共生の社会をつくるために行動する、きっかけとなることを期待して作成しました。

当事者も含め、より多くの人が、日々の暮らしの中での生活問題や地域課題への気づき、学びを通して、具体的な行動を行い、いろいろな人や活動とつながっていくという、だれもが主役の「ともに生きる福祉社会づくり」にむけた、ともしび運動の原点に基づいた指針です。

市町村ともしび運動推進組織など、一人ひとりの県民の行動を広げていくための働きかけを行うときに使っていただきたいと考えています。

ともしび運動「新行動指針」

行動指針1 暮らしの中で気づき、関心をもつ

日々の生活の中で、何かに気づき、関心をもつこと。そこから始めてみましょう。私たちの周りにはいる人や、住んでいる地域のことを見直すことで、何か新しい発見があるはずです。

マスコミで報道されることが多い虐待事件も、もし近所の人やかかわりのある人たちが気づいていれば、深刻な事態になる前に問題を発見できたかもしれません。

このような深刻な問題だけではなく、私たちの周りにはいる人が困りごとや問題を抱えていることがあります。

互いの存在を認め合うには、プライバシーに気を配りながら、いろいろなことに気づき、関心をもつことが大切です。

【行動・取り組み例】

- 自分とは異なる考え方や状況にある人がいることに気づく
- 一人暮らしの高齢者や障害のある人たちが、どのようなことで不自由な生活をしているのか、関心をもつ
- 自らのもつ技術や経験で、地域で何かできることがあるか調べる

行動指針2 気づいたことについて学び、理解を深める

気づいたことや、少しでも関心をもったことについて、学び、理解を深めてみましょう。

高齢者の方へ電車やバスの中で、席を譲ったのに断られることがあります。なぜ、座ってもらえないのでしょうか。まだ年寄り扱いされたくないとの気持ちからかもしれませんし、ひざを曲げるのが辛いからなのかもしれません。

このようなこと以外にも、一見しただけでは、どうしていいか判断のつかないことはよくあります。気づいたこと、関心をもったことを学び、理解を深めていくことは大切なことです。

学びの場は、学校や講座だけではなく、人との会話や普段の出来事など、日々の生活の中にたくさんあります。

私たち一人ひとりの学びと理解は、みんながともに生きるまちをつくっていく一歩につながります。

【行動・取り組み例】

- 近所にいる子育て中の親や、高齢者の介護をしている人の話を聞き、学ぶ
- 住んでいる地域や通勤・通学している地域に、どんな活動や問題があるのかを調べる
- ボランティア研修や講座に参加する

- 地域の生活問題解決のために、近所の企業や団体の活動を調べる
- ボランティア活動や社会福祉施設の活動には、どういうものがあるのかを学ぶ

行動指針3 気づいたことに対して行動し、発信する

地域の様々な生活問題に気づき、関心をもつことができれば、何か具体的な行動に踏み出してみましょう。

気づいたこと、学んだことを身近な人や地域の人に発信してみましょう。そして、価値観の違いも認めあい、地域での問題や原因を明らかにし、自分自身でできること、地域のみinnで解決できるものは、具体的に取り組みましょう。すぐに解決できないことは、関係団体や機関にも問題を投げかけ、解決にむけた協働の取り組みにつなげていきましょう。

具体的な行動は、身近な地域でグループや団体、企業などができることから、無理のない範囲ではじめましょう。

【行動・取り組み例】

- 自分のこと、周りのことで気づいたことを家族や地域に伝える
- 困っている人がいたら、まず声をかけ、求められれば手伝う
- 地域活動やボランティア活動に参加する
- 様々なハンディのある人も使える、製品やサービスを調べる

行動指針4 他の人やグループ・団体とつながる、つなげる

個人、グループ、団体、施設、企業、行政など、いろいろな立場の人が、みんなで手を携えていくことが、活動の広がりにつながります。

一人暮らしの高齢者や障害者にとっては、日々の生活でのごみ出しや、蛍光灯の取り替えが大変であったり、いろいろと生活上の困りごとになることがあります。このような問題を解決するとき、近隣の人が連携して支えていくことができれば、活動も続けやすくなります。また、近所に知り合いも増え、災害時にも日頃のつながりが生きてくるはずですよ。

みんながともに生きていく福祉社会づくりのためには、日ごろから、様々な形で人や地域とつながっていることが大切です。

【行動・取り組み例】

- 世代や立場を超えた交流の機会に参加する
- 問題を解決していくために、近隣の人やグループ・団体、関係機関に協力を求める
- 地域の住民や様々な団体が交流できる機会を設け、ネットワークをつくる

《指針による行動を促すための組織の役割》

(1) 市町村域(市町村ともしび運動推進組織など)

【指針による行動を住民に広げるための取り組み】

- ◇ 行動指針やふれあいメッセージ集を活用した取り組みの推進
- ◇ 障害者週間キャンペーン等による障害者理解の促進
- ◇ 地域での暮らしやつながりの回復など、ともに生きるうえで大切にしなければならないことを考える機会の提供
- ◇ 異世代の交流など、コミュニケーションが生まれる場づくり
- ◇ 住民が集い、互いの生活問題や地域の課題を聞く場や学びの場づくり
- ◇ IT 活用普及啓発などとおした障害者の社会参加の支援
- ◇ 地域内で活動している民生委員児童委員、自治会、ボランティア、団体、企業などの活動情報の提供
- ◇ 日常生活の中で取り組みが可能な先駆的な事例の紹介
- ◇ 地域の課題に対応できるネットワークづくりの推進
- ◇ 当事者の社会参加や自立生活を支える主体的な取り組みの推進

(2) 県域(県社協)

【指針による行動を広げるための取り組みを行う組織への活動支援、環境整備】

- ◇ 市町村ともしび運動推進組織、市町村社協などの支えあいの地域づくりにむけた、具体的実践への支援
- ◇ 市町村ともしび運動推進組織の情報交換、先進事例などの紹介
- ◇ 地域課題の解決にむけたモデル事業や県域で取り組む方が効果的な事業の実施
- ◇ ともしび基金や一般寄付金の効果的な活用と県民理解の促進

(3) 行政

ともしび運動は福祉活動への住民参加をなによりも重視し、住民と行政の多様な取り組みと協働により、「ともに生きる福祉社会づくり」を目標に進められてきました。いわば、地域福祉の基礎となる理念であり、ともしび運動と地域福祉とは一体的に進めることができると考えられます。

市町村で進む地域福祉計画の策定や推進を通して、住民の主体的参加と協働による民間福祉活動の基盤整備を図っていく役割が大切です。